

0歳児クラスで保護者との 関係を築く土台を作る



社会福祉法人 愛護会

第二東水沢保育園

保育士 柴田 恵利

(1) 研究主題

0歳児クラスで保護者との関係を築く土台を作る

(2) 主題設定の理由

私は保育士になり14年目を迎え、初めて0歳児クラスの担任になった。そこで今までの自分の経験も踏まえ、保護者との良好な関係作りを大切にしたいと考えた。

【保育士、保育園にとって、保育所に入所している保護者に対する支援は子どもの最善の利益を保障する】と保育所保育指針第6章（参考文献1、27ページ）に保護者に対する支援について盛り込まれており、保護者に対する支援は非常に重要である。スムーズで継続的な支援をするためには保護者との良好な関係が欠かせない。

私も日々働く中で、年々、子ども自身が抱える問題や家庭が抱える問題が増えているのを感じている。問題を抱える子どもや保護者への支援を考えた時、園と保護者とのよい関係が築けていた場合は、問題解決の糸口を作ることができたり、悩みを共有することでほっとした保護者の顔を見ることができたケースもあったが、保護者と良い関係が築けなかった場合は、支援の方法もうまくいかないまま卒園を迎え、小学校に送り出したケースも多く経験している。保護者と良好な関係ができている場合は、多少言い難いことも伝えることができ、保護者も聞いてくれる姿がある。そこには「この子のために」という思いが互いにあることをしっかり感じあえていたからではないだろうか。「この子のために」という思いを互いに共有しあい、子どもの育ちをしっかりと感じてもらうこと、子どもの姿を見つめ、認めることで成長に気づき、それを嬉しく、可愛いと思えあえること、園と保護者が協力し、子どもの成長を見守り喜びあえる幸せは大きいと感じる。

0歳児クラスの担任になり、この幸せを「どの保護者とも感じあえる関係」を作るためにはどうしたらよいかを考えた。初めての子育て、初めての保育園生活、産休や育休が明け、職場復帰という、大きな悩みや不安、心配を抱えている母親が多い。母親だけではなく、父親もさまざまな不安を抱えていることだろう。そのような0歳児の保護者が抱える問題をしっかりと捉え、関係を築く必要があると考えた。しかし、保護者との関係はすぐに築けるものではない。そして担任一人との関係ではなく、園全体との関係を良好なものにしていかなければ、卒園までを見通した、スムーズで継続的な支援は難しい。

そこで、まず0歳児クラスで、良好な関係づくりのための【土台】を築きたいと考え本主題を設定した。

(3) 研究のねらい

- ・0歳児の発達、保護者との関係作りについて理論研究を行い、その内容と意味を知る。
- ・子どものよりよい成長発達をめざし、保護者の子育てを応援し養育力を向上させるため、園と保護者がよりよい関係を築く土台を作る。

(4) 研究の仮説

- ・0歳児期に子どもの発達や子育てについて知らせながら、子育てへの意欲や自信を持たせ、保護者の孤独感を減らすなど、丁寧な保護者支援を行っていくことが園に対する信頼関係を築く土台となるのではないか。

(5) 研究の内容

I 理論研究

- ① 専門書や研修を通して、学んだ内容をまとめる。

II 保育実践

- ① クラス担任、クラスの保護者同士で話す時間を設け、保育園生活が初めての親もベテランの親も、早く馴染める雰囲気を作る。
- ② 子どもの発達について知らせ、一緒に考える機会を作る。
- ③ 保護者が子どもの成長を感じやすい場として園行事を捉え、行事を通し保護者と一緒に成長を喜ぶ。

(6) 研究の方法

I 理論研究

- ① 研修会への参加、専門書を使用して知識、理論を深める。

II 保育実践

- ① 保育参加日、懇親会を通して関係作りのキッカケを作る。
- ② クラス便り、懇談会を通して発達を知らせるとともに、連絡帳や個別への声がけで、一人ひとりに合わせた現在の発達の状況や今後の見通しを知らせる。
- ③ 園全体の行事と連携させながらクラス独自の活動を行う。

(7) 研究の実際

I 理論研究

【 0歳児の発達について 】

『新保育所保育指針を読む[解説・資料・実践] (社会福祉法人 全国社会福祉協議会)』(参考文献1) のなかでは以下のように書かれていた。

発達過程

子どもの発達過程は、おおむね8つの区分としてとらえられる。ただし、この区分は、同年齢の子どもの均一的な発達の基準ではなく、一人ひとりの子どもの発達過程としてとらえるべきものである。また、様々な条件により子どもに発達上の課題や保育所の生活になじみにくいなどの状態が見られても、保育士等は、子ども自身の力を十分に認め、一人ひとりの発達過程や心身の状態に応じた適切な援助及び環境構成を行うことが重要である。

(1) おおむね6か月未満

誕生後、母体内から外界への急激な環境の変化に適応し、著しい発達が見られる。首がすわり、手足の動きが活発になり、その後、寝返り、腹ばいなど全身の動きが活発になる。視覚、聴覚などの感覚の発達はめざましく、泣く、笑うなどの表情の変化や身体の動き、喃語などで自分の欲求を表現し、これは応答的に関わる特定の大人との間に情緒的な絆が形成される。

(2) おおむね6か月から1歳3か月未満

座る、はう、立つ、つたい歩きといった運動機能が発達すること、及び腕や手先を意図的に動かせるようになることにより、周囲の人や物に興味を示し、探索活動が活発になる。特定の大人との応答的な関わりにより、情緒的な絆が深まり、あやしてもらおうと喜ぶなどやり取りが盛んになる一方で、人見知りをするようになる。また、身近な大人との関係の中で、自分の意思や欲求を身振りなどで伝えようとし、大人から自分に向けられた気持ちや簡単な言葉が分かるようになる。食事は、離乳食から幼児食へ徐々に移行する。

(3) おおむね1歳3か月から2歳未満

歩き始め、手を使い、言葉を話すようになることにより、身近な人や身の回りの物に自発的に働きかけていく。歩く、押す、つまむ、めくるなど様々な運動機能の発達や新しい行動の獲得により、環境に働きかける意欲を一層高める。

その中で、物をやり取りしたり、取り合ったりする姿が見られるとともに、玩具等を実物に見立てるなどの象徴機能が発達し、人や物との関わりが強まる。また、大人の言うことが分かるようになり、自分の意思を親しい大人に伝えたいという欲求が高まる。指差し、身振り、片言などを盛んに使うようになり、二語文を話し始める。

とあり、その後は（４）おおむね２歳、（５）おおむね３歳、（６）おおむね４歳、（７）おおむね５歳、（８）おおむね６歳の八つの区分に分けて解説されている。本研究ではおおむね０歳児～１歳児の発達を中心としているので、２歳以降の解説については割愛をする。

『発達がわかれば子どもが見える 田中真介（株式会社ぎょうせい）』（参考文献２）では

- ・第２章 首が座るまで【０か月～３か月】
- ・第３章 寝返りの始まり【４か月～６か月】
- ・第４章 這い這いの始まり【６か月～７か月】
- ・第５章 這い這いの充実【８か月～９か月】
- ・第６章 つかまり立ちからつたい歩きへ【１０か月～１２か月】
- ・第７章 歩行の完成【１歳前半（１歳１か月～１歳６か月）】
- ・第８章 調整しながら歩く【１歳後半（１歳７か月～２歳）】
- ・第９章 自我の拡大から充実へ【２～３歳】
- ・第１０章 自励心、自制心が育つケレドモ、ケレドモ【３歳～４歳６か月】
- ・第１１章 自励心、自制心の発揮【４歳６か月～５歳０か月】
- ・第１２章 真ん中の発見【５歳０か月～５歳１０か月】
- ・第１３章 認め合い育ちあう【５歳１０か月～７歳】

に分け、全身発達について、例えば首のすわりから、腹ばいで上半身を支える筋力をつける大切さや、握る、見る遊びは、目と手の協応となり、遊びから生活の中でのスキルに発展をしていくことなどが、解説されている。

その他の文献では、

『新 発達がわかれば子どもが見える 田中真介（株式会社ぎょうせい）』

『0.1.2歳児の心の育ちと保育 今井和子（小学館）』

『0歳～6歳子どもの発達と保育の本 加藤繁美（学研）』

などがある。いずれの文献においても０歳児クラスの子どもたち（０歳～１歳１１か月）は発達が月齢に応じて大きく違っている。例えば、あそびへの反応は大人へ伝えるための手差しから、指差しへ、そして喃語、と成長し、あそびの内

容も入れるおもちゃを、最初は1つ入れることができる姿から何度も繰り返し遊べるようになる。破いて遊べる紙の素材や大きさも、月齢が1ヶ月違うだけで、大きく違う。一人ひとりの発達の違いはあるにしても、成長を感じる場面でもある。そのため月齢ごとの発達を理解し、個々の発達を丁寧に見つめ援助していくことが大切であることがわかった。

【 保護者との関係作りについて 】

『子育て支援者のためのカウンセリングマインド読本 子育て支援者のためのカウンセリングマインド普及事業 事業委員会』(参考文献9)によれば、子育てに悩む母親の声は30年前からあり、母親は「一人の時間がない」「話し相手がない」「社会との接点がない」つらさを抱えているとされている。そこで、今必要な子育て支援とは、「孤独な子育てを強いられている母親」にとっては「孤独から解放される場と機会」が必要であり、親が子どもとともに暮らすなかで、親として必要な知識や態度を身につけていけるような支援が必要であると書かれている。

また、『これからの幼児教育 2014年秋号 (ベネッセ教育総合研究所)』(参考文献11)には保護者との環境構築が困難になってきていることが書かれている。その背景には【社会の変化と地域の対応力の低下が考えられるとし、そうした状況だからこそ、一緒に子どもを育てていく仲間であるという意識に立つことが、今改めて必要】(参考文献11より引用)と書かれている。どんな保護者であっても親でありたいという気持ちを認め、支え続けることが保育者の役割であり、その保育者の態度が保護者を通して子どもの最大の利益へつながる、とある。『これからの幼児教育 2016年春号 (ベネッセ教育総合研究所)』(参考文献11)には「保護者との関係を深めると子どもが幸せになる」とし、保護者との関係を深めて保育が豊かになると、子どものためになり、保護者の園に対する満足度も高まるとある。その関係性を深める出発点は子どもの成長を伝えることにあり、その情報は保育の質に左右されることから、保育者はプロフェッショナルとして、あそびの見通しをもち、その意味や学びの物語を適切に伝えることが大切とある。また、子ども・子育て支援制度がスタートし、園を取り巻く環境が大きく変わる中で、保護者との関係性を見つめ直す動きが広がっているとあり、今、社会的に非常に大切な動きであることがわかる。

これらの資料は主に、園、保育者側からの視点で書かれているもので、『ちいさいなかま(379号、383号、558号、592号、632号、604号(ちいさいなかま社)』(参考文献10)の保護者からのコーナーからは、「保育園でつながった関係が、後々子育てで困ったことがあったときに、助けてもらえる関係になる」と思っ

ている保護者がいることを知った。また、「園の行事だけでは仲良くなれない」と思いながら「自分は人見知りだから」とあきらめていたり、「クレームの対象」となることを恐れ、助け合う関係にまで発展をさせることができないという、つまり複雑な思いをもつ保護者が存在することも知った。これは直接、園の保護者から聞くことは難しいが、アンケートには兆候を感じることができ、大変参考になった。

また、岩手大学教職大学院設置準備室准教授 佐々木全 氏を講師に「行動上に問題を抱えた子どもの理解と対応」～愛着障害の観点から～というテーマで行われた研修に参加した。その中で、①愛着障害という文字からのイメージや、親子関係だけの障害ではないこと、②「子ども」と「大人」という関係に課題があることを理解した。それは、子どもが親からの愛情で満たされないのであれば、保育士が代替をしても良いこと、また、「愛着障害”があるから、問題なのではなく、周囲の大人（保育士や支援者）がどのような援助をするのか、どう接するのかが、大切なこと」であり、「症状が診断基準を満たすか、どうかを判断し、診断名をつけることが重要なのではなく、診断こそがスタートで、そこから、どのような支援をするのかが、重要である」ことが、とても鮮明に印象に残った講演であった。

Ⅱ 保育実践

【 事例1：保育参加日 】

○ ねらい

- ・保護者に園での生活を知ってもらう。
- ・保育者と保護者、保護者同士が顔見知りになり言葉を交わすきっかけをつくる。

○ 内容

テーマ	お家の人も一緒に保育園の一日を体験しよう！	
活動	配慮及び留意事項	当日の様子
<p>朝の会</p> <p>歌</p> <p>手遊び</p> <p>挨拶</p> <p>呼名</p> <p>ベビー</p> <p>マッサージ</p> <p>水分補給</p> <p>手作り</p> <p>おもちゃ製作</p> <p>高月齢児と低月齢児に分かれて活動</p> <p>高月齢児</p> <p>…はいはいで</p> <p>園内探検</p> <p>離乳食</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・柔らかく、温かい雰囲気作りを心がける。 ・親子でペアになって活動する時間を多くすることで親と子の顔を知ってもらえるようにする。 ・活動を進める担当職員を決めることで同じ職員だけが前に立つのではなく、若手職員、臨時職員も親に知ってもらえるようにする。 ・ノンカフェインの紅茶を数種類用意し、保護者もリラックスできるような雰囲気を作るよう気を配る。 ・職員、子ども、保護者の名前を呼ぶ機会を意識的に多く持つことで保護者が同じクラスの子や職員の名前を覚えられるようにする。 ・今日は親子でいるのでいつも通りではないことを伝え、親に甘えぐずったりする姿も大切な姿であることと園でのいつもの様子を口頭で丁寧に伝えていく。その際、可愛い姿や成長を感じられる場面を選び話すようにする。 ・職員は保護者の間に位置づくように気をつけ、保育者を拠点とし 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝は保護者も緊張した姿が見られる。一人ひとりに声をかけ、日ごろの様子等を話した。 ・歌が好きで保育士と一緒に歌う高月齢児の姿に場が和む。 ・ベビーマッサージでは心地よくて眠ってしまう子が多かった。寝てしまったわが子をどのようにしてよいか分からず、戸惑う母もいたが、保育者の「気持ちよかったですね、そのままでもいいですよ」の声でほっとした表情を見せていた。 ・材料を2～3人で使うように準備し、保護者同士が必然的に言葉を交わすよう環境を作った。ベビーマッサージで寝てしまった子が多く、保護者同士が話しながらゆったりおもちゃ作りを行うことができた。 ・製作になると夢中になる保護者が多い。簡単に作れるもの(製作時間約5分程度)にしたことで、午前睡のちょうどいい時間内で製作を終えることができた。 ・高月齢…離乳食について園での形態をみてもらいながら、各家庭での様子を聞いたり個別にゆったりと話すことができた。 ・低月齢児…園内探検では在園児の母が新入園児の母に園のことについて話をしてくれた。腹ばいタイムなど子どもの様子を見ながら保護

<p>低月齢児 …腹ばいタイム だっこで園内 探検</p> <p>○参加日終了 後に懇親会を 実施</p>	<p>て保護者同士をつなげられるよ うに配慮する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・少人数のグループで活動するこ とで保護者同士が話しやすい雰 囲気を作る。 ・園内の探検の際は施設を知って もらうだけでなく、各クラスの様 子も伝えることで成長の見通し が持てるようにする。 ・自己紹介時に「学生時代の部活、 好きなもの」など話やすく、話 題にしやすいものを入れること で、その後の会話のきっかけを作 る。 	<p>者同士の情報交換の場ともなった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・懇親会では、自己紹介時に、学生 時代の部活・好きなものを話しても らった。それが話題となり、終了時 間が延びるほど話が盛り上がった。
---	---	---

【 事例 2 : クラスだより 】

○ ねらい

- ・保護者に発達について知らせる機会とする。
- ・その時のクラスの様子に応じた内容を選ぶことで園での様子を伝えやすくし、保護者からも話題にしやすくすることで悩みを具体化させる。

○ 内容

平成 27 年度クラスだより「子育てアドバイス」

《 テーマ 》 ※一部抜粋

0 歳児の発達の流れ / はらばい、はいはいってとっても大切。

はらばい&はいはいであそぼう！(あそび方、援助方法についての紹介)

離乳食について① / 離乳食について② / 靴の選び方

水分補給について / 赤ちゃんとテレビについて / 薄着をしましょう

まねっこを楽しもう！ / 寝る子は育つ!!(十分な睡眠時間とは)

手指の発達 / 手指の発達を促すあそび / 自己主張 / 自己主張②

じぶんでできるようになるために / 絵本を楽しもう♡



0歳児期は、人間としての身体、心の基礎をつくる、とても大切な時期です。クラスだよりを通し、そんな0歳児期にとって大切な子育てのワンポイントアドバイスをのせていきますので、ぜひ参考にしてください。お迎えの時にもおはなしができますので、気になることがありましたら、おはなしください。

第1回目は、0歳児の発達の流れです。子どもの成長にはきちんと流れがあり、その流れに沿って成長しないと、どこかで問題がでてくる場合があります。0歳児期に限らず、幼児期は個人差が大きいものです。“0ヶ月になっただけ、△△ができない!!”大丈夫かしら”とあまり不安になることはありません。流れを知り、見通しをもつて子どもの育ちを見つめ、援助していくことが大切です。

0歳児の発達の流れ



〈6ヶ月未満〉泣くことで訴え、それに優しく愛情豊かに応えてもらうことで、人に対する基本的な信頼感が育っていく大切な時期です。

- ★運動機能 … ・首が座る。
 - ・寝返りや月齢が11ができるようになり、全身のうごきをしたのびようになる。
 - ・音や声のする方に顔を向ける。
- ★ことば・認識 … ・「ア、エ、ウー」といった母音や「アウアウアウ」といったくり返しの音、喃語を発するようになる。
 - ・目の前にあるものを触ったり、口に入れてたりして確かめる。
- ★感情・社会性 … ・あやすとよく笑うようになる。
 - ・表情や体の動きで自分の欲求を表すようになる。



〈6ヶ月～1歳3ヶ月未満〉お座りやハイハイ、つかまり立ちができるようになる等、運動機能の発達が目ざましい時期です。

- ★運動機能 … ・お座りやハイハイ、つかまり立ちや伝い歩きをするようになる。
 - ・手を自由にうごかすようになる。 → 1歳すぎが理想です
 - ・母乳食から段階をふんで幼児食へ移行する。
- ★ことば・認識 … ・簡単なことばが分かるようになる。
 - ・自分の欲求を身振りや指さしで伝える。
- ★感情・社会性 … ・特定の大人との情緒的な絆が深まる。
 - ・人見知りをするようになる。
 - ・身近な人やものに興を示す。

次号では、腹ばい、ハイハイの大切さについて掲載します。



はらばい・ハイハイってと、とても大切。

現代の子供たちはハイハイをあまりせずにつかまり立ちから歩行へとすすむ子がとても多いと言われています。すると、「ハイハイをきちんとさせよう」という言葉も同時に多く聞かれるようになりました。それはどうしてなのでしょう？ その理由を知らずにはらばい＆ハイハイをたくさんさせよう。

●ハイハイが大切なのは…

① 全身の筋力を強化できるから。

人間の体は脳が発達し、頭が重い生き物にと、実は、実はハイハイが、最も負荷のかかる姿勢です。この姿勢を取り、手足を使い、動くことで、全身の筋力がきたえられます。背筋、腹筋等はもちろん、呼吸器などの内臓もきたえられるのです。そしてハイハイは足の指の付け根に力を入れ、床を蹴るようにしてすすみます。足の指の付け根の筋力は立ち上がるために必要だったり、立った時にバランスをとるための大切な筋力です。ヒトと二足歩行に必要な全身の筋力、風邪をひきにくい健康な身体を作るための全身の筋力をハイハイすることできたえることができるのです。

② 協応動作の基礎作りだから。

ハイハイは右手と左足、左手と右足というように2つの力を同時に使い、行きます。この2つの力を同時に使うことを「協応」といいます。そして私たちの生活は協応の動作で成り立っています。その基礎をハイハイで作るのです。

③ 手と足への刺激は脳への刺激となるから。

手と足は脳と密接な関係があるといわれています。ハイハイで脳を刺激することで脳の成長も促すことができるのです。

●腹ばいが大切なのは…

ハイハイをするためにはまず腹ばいが大切な歩。ハイハイのための筋力や姿勢を腹ばいを繰り返すことで育てるのです。

☆ 次号では どうやら、腹ばい＆ハイハイをさせるか ワンポイントアドバイス しますの



はらばい & ハイハイであそぼう!

前号で はいはいと はらばいの大切さについてお知らせしました。そこで今回は具体的に どうやったら うつせを はいはいをさせるかお知らせします。



1. はらばいに慣れよう。

- 1日に1~2回、5分前後、うつせの姿勢にしなせよう。
(生後2か月頃から行えます。)慣れたら時間を伸ばします。
- 体調の良い時、機嫌の良い時に行いましょう。
- 畳など硬めの床の上で行いましょう。
- 胸の下にロールションなどを置いておくと、姿勢が取りやすくなります。

ポイント

★ 顔をしっかりと上げられるよう、大人が前方から声をかけたり、音のなるおもちゃで気をひいてあげましょう。

2. はらばい から はいはいへ。

- 赤ちゃんを はらばいの姿勢にさせ、30cm 前方から声をかけたり、ボールを転がすなど、おもちゃで気をひきましょう。
「とりたい」「すぐおたい」という気持ちを持たせよう。

ポイント

★ 足の裏を水平に押し、大人がひざを曲げ、あぐら、伸びようとすねを發揮させることで、すね力を蓄えられます。



3. はいはいをたのしもう!



- 大人も一緒に はいはいする と 大好きな大人と視線が合うことで、楽しい気持ちで、まきまきになります。
- つかまり立ちをしたり、歩きはじめると、はいはいを嫌がるようになる子もいますが、まだ はいはいは大切です。テーブルの下まで入る、大人がトネルになるなど、はいはいを楽しい環境を作ってください。

※ 次号のテーマは 離乳食について です。

【 事例 3 : ミニ運動会 】

○ ねらい

- ・子どもたちの発達に合わせて無理なく行事に参加し、子どもの成長を共に喜び合う。

○ 内容

実施期間・時間	<ul style="list-style-type: none"> ・運動会の1週間前 ・お迎えの時間（16：00～20：00） ※各自の迎え時間に合わせて実施
活動	<ul style="list-style-type: none"> ・運動会当日に行うふれあい遊びの練習 ・はいはい競争 ※まだ歩行が確立していない子をメインとする (歩行が確立した子は運動会当日に園庭での競技に参加するため)
配慮事項	
<ul style="list-style-type: none"> ・保護者の都合のいい時間に行うこと、何度も参加してよいなど柔軟性を持たせる。 ・応援の旗を作り、遅番の職員で盛り上げて行い運動会当日でなくても運動会の雰囲気が感じられるようにする。 ・職員が運動能力の発表の場としっかりとらえ、保護者に声をかけ、ともに成長を喜び合えるようにする。 ・歩行が確立した子も一緒にはいはいたり、保護者に向かって歩く姿を見てもらい、運動会当日にできなくても保護者が成長を感じられる機会とする。 	
当日の様子	
<ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとりの発達に合わせて、はいはい、ずりばい、寝返りなど種目を決めて行った。保護者も恥ずかしそうにしながらも、保育者と一緒に応援し、できると喜んでいた。 ・はじめてやる日は戸惑う様子が見られた子も、何日間か行くと、笑顔で保護者のもとへ進む姿が見られた。 ・やりたい子は友達と一緒に、何度もやることで、より日常の姿を見てもらうことができた。 ・歩行が完成した子も、一緒に何度も行ったことでよい練習となり、運動会本番では泣かずに競技することができた。 	

(8) 結果・考察

I 理論研究

子どもの発達については様々な資料や研修を受けることで、より深く学ぶことができた。そして、この理論研究をもとに保育実践を行った。理論研究を行ったことで文献と実際の子どもたちの姿と照らし合わせながら、さらに理解を深め学ぶことができた。しかし、資料の通りではないことも多く、先輩保育士に聞きながら、子どもの育ちをしっかりと見つめることをこころがけた。保護者との関係作りにおいては、自分の経験や感覚、先輩保育士から聞いたことが、感覚的なものだけではないことが理論研究を通し解り、自分の自信とすることができた。今後も様々な資料を参考にしながら、自分で保育を工夫して行っていくようにしたい。

II 保育実践

【 事例1：保育参加日 】

保護者には園を知ってもらおう事をねらいにし、職員間では職員と保護者、保護者と保護者をつなぐきっかけにすることをねらいとし、活動内容を考え職員で細かく打ち合わせて行った。当日は雰囲気作りがうまくいったのか、非常に和やかなムードで行うことが出来た。いつも送り迎えをしている母親にとっても同じクラスの保護者と顔見知りになるよいきっかけになり、初めて園の行事に参加した父親にとっても園の様子、雰囲気を好意的に受け取ってもらえたように感じた。

その中で関わりが難しいと感じていた保護者とも少し打ち解けることができた。送り迎えは祖母か父で、園にほとんど来ることがなく今まで子どもにあまり関心がないと思われていた母と、子どものかわいい姿について話すことで母が笑顔で子どもを見つめ、そんな時間を共有したからこそ、その後の生活の中で気になる姿がみられたときに母と一緒に考え、話すことができたケースや、入園時の面接で養育力の低さを感じられ、我が子に対してもどう関わってよいかわからずにいるように見られた母が、参加日や懇親会で、職員や保護者と話したことで我が子と同じクラスの子に自ら関わっていく姿に繋がられたケースがあった。

保護者同志で話ができるきっかけをつくり、話す機会を設けることができた。今後も保護者同士や保育士と話す機会を作ることで、保護者の人間関係を広げ、保護者の孤独感を減らす工夫を継続していく必要があると考えた。

【 事例2：クラスだより 】

子育てアドバイスではその時の子どもたちの様子に合わせた内容を選ぶようにしていたが、0歳児は月齢や個人差によっても差が大きく、やはり保護者自身が悩んだり、困っている状況でないとその欄は読んでもあまり参考にはならなかったのではないだろうか。保護者によっては、我が子の月齢と合わなくても、なんとかやろうとしたが、うまくいかないといった悩みが聞かれたケースもあった。その時は、その子にあわせた具体的な方法を話すことで悩みを解消し、個別に対応できたことで悩みの解決につながったが、園からの情報にとらわれ過ぎてしまい、うまくいかないといった悩みにもつながってしまったのではないかと考えられた。

振り返ってみると、クラスだよりに関しての保護者からの反応は、ほとんどなく、見出しや書き方など、読んでみたいと思わせるような工夫がもっと必要だった。保護者が関心をもって読み始められるようなものにしなければ、読んでもらうことすら難しく、園からの情報発信としては弱いものになってしまう。内容も子どもたちの姿が見えるような書き方をし、その時にどういった関わりが良いのかという具体的なものを書くことで、保護者が関わりを知り、考えるきっかけにできたのではないだろうか。ペアレントトレーニングについてももっと学びながら、クラス便りを通して子どもの発達を知らせる方法の工夫が必要だったと感じた。

【 事例3：ミニ運動会 】

0歳児の運動会への参加は毎年園でも悩み、協議する。低月齢児を炎天下へ出すのか、逆に寒かったらどうするのか、大勢の観客がいていつもと違う雰囲気の中でどの子どもも機嫌よく競技に参加するのは難しい。そこで、運動会は運動能力の発表の場であることを職員間で確認し合い、0歳児はお迎え時にミニ運動会を行うことで運動能力の成長を共に感じあえる機会としたいと考えた。

ミニ運動会は期間を長く持ったことでお迎えにくるお母さんたちの時間に合わせて行うことができ、また子どもたちにとってもその時の気分に応じて行うことができた。今日はしなくても次の日にできたり、歩行が確立した子達にとっても保護者に向かって走るという運動会当日のいい練習にもなった。当日は歩行が確立した子どもたちは大勢のお客さんの前でもにこにこ保護者に向かって走る可愛い姿をみせてくれ、ふれあい遊びだけに参加した保護者もいい表情だった。また、この運動会ごっこは歩行が確立してきたころに保護者に声をかけて何度か行った。運動会の時期には歩けなかった子達も同様の経験をすることで保護者にとって成長を感じ、行事に参加した気持ちも少なからず味わえたのではないだろうかと思う。

保護者の中には0歳児は発達に個人差があるとわかっているにもかかわらず同じ月齢でも歩けないことを気にするケースがあった。しかし、このミニ運動会を通し、その子なりの運動能力の発表をし、成長を職員が喜んでいる姿を見てもらい、その子が他の日に他の保護者の前でははいはいをし、上手だねと声をかけられたり、他の子の真似をしてさまざまな姿を見せてくれたことを保護者に話すと、非常に嬉しそうにし、運動会当日にふれあい遊びのみの参加でも楽しそうにあそぶ姿が見られた。このケースの場合、行事を通し成長を感じ、職員や他保護者など他者に認められた喜びを実感したことで、気持ちに安心感や余裕が生まれたのではないだろうか。また、別のケースでは子どもの育ちに関して関心が低いように感じられ、ミニ運動会を通し、成長を感じてもらいたいと思っていたが、我が子がまだ小さいからと行事そのものにもあまり関心がなく、ミニ運動会にも参加してもらえない保護者もいた。このように小さくても園の行事にはしっかりと参加したいと考える保護者と、赤ちゃんに行事なんて関係ないと考える保護者の二極化が進んでいるように感じられた。保護者のニーズを的確に捉え、支援する難しさを感じた。

以上の考察から、仮説を丁寧に検証し、保護者支援を行っていくことが、園に対する信頼関係を築く土台となる。しかし、①月齢ごとの発達を理解しても、実際には、個人差が存在すること、②保護者が求めているものは、経験や感覚で捉えているつもりだが、本当の保護者の気持ちやニーズがどこにあるのかを、的確に理論研究や実践研究から測りとることは難しい。また、個別対応ケースが増えてきている反面、個別対応をしていくには、職員のスキルが必要となり、職員の対応に差が出ていることも感じる。

よって、仮説からは実証できなかったもの、保護者との関係作りは、今後も続いていくものであり、見守りながら、関わり続けていくことが大切と考えられる。

(9) 今後の課題

子どもの発達を日常の様子から成長の見通しまで分かりやすく伝えるために、もっと発達について学ぶことや、さまざまな保護者へ支援するためにソーシャルワーク、ペアレントトレーニングについても学ぶなど、保育士としてのスキルアップが必要と感じた。

また、対応が難しい家庭が年々増えてきている傾向があるが、多方向からの支援につなげるためにも、園内はもちろん、他機関との情報共有や連携も大切にしたい。当園は、0歳児の担任が、5歳児まで持ち上がるわけではない。だからこそ、さまざまな職員が各家庭と良い関係を築いていく必要がある。実践を

通し、「初めての保育園」、「初めてのクラス」の関係づくりのスタートとしては良いキッカケを作りつつあると思っている。また、これは私個人のことだけでなく、同じクラスを担当した若手職員が保護者から「話を聞いてもらえてうれしかった」という言葉を頂いている。これは保護者にとっても頼れる人が増えた良い機会であり、若手職員にとっても保育士としての自信となる言葉であり、やがて、園への信頼や保護者との良好な関係に繋がっていくのではないかと思われる出来事だった。

子どもの最善の利益を保障するためには保育園と保護者の関係性が重要であると考え、よりよい関係を築くためには、長期間にわたり保育園にわが子を通わせる保護者がいるからこそ、入り口での0歳児クラスで、園を知ってもらい、好感、安心を感じてもらうことが保護者とのよりよい関係の土台となり、0歳児クラスにはその大きな役割があると考えた。社会の宝である子どもたちが、よりよく育つために、私たちは保護者の支援も行っていかなければならない。すぐに結果が出るものではないが、これからも園内の職員と連携をとりあい、園全体で家庭を支援し、家庭と一緒に子どもたちの育ちを応援できるような保育士になっていきたいと考える。

[参考・引用文献]

- ・参考文献1：新保育所保育指針を読む[解説・資料・実践]（社会福祉法人 全国社会福祉協議会）
- ・参考文献2：発達がわかれば子どもが見える 田中真介（株式会社ぎょうせい）
- ・参考文献3：新 発達がわかれば子どもが見える 田中真介（株式会社ぎょうせい）
- ・参考文献4：イラストでみる乳幼児の一日の生活の仕方 河添邦俊・河添幸江（ささら書房）
- ・参考文献5：0.1.2歳児の心の育ちと保育 今井和子（小学館）
- ・参考文献6：0歳～6歳心の育ちと対話する保育の本 加藤繁美（学研）
- ・参考文献7：0歳～6歳子どもの発達と保育の本 加藤繁美（学研）
- ・参考文献8：0～3歳能力を育てる好奇心を引き出す 汐見稔幸（主婦の友社）
- ・参考文献9：子育て支援者のためのカウンセリングマインド読本
（子育て支援者のためのカウンセリングマインド普及事業 事業委員会）
- ・参考文献10：ちいさいなかま 379号、383号、558号、592号、632号（ちいさいなかま社）
- ・参考文献11：これからの幼児教育 2014年秋号、2016年春号（ベネッセ教育総合研究所）

- ・参考文献 12：保育士会だより 198 266 267（社会福祉法人 全国社会福祉法人 全国保育士会）
- ・参考文献 13：発達 vol135 【特集】子どもの精神医学と親子支援 DSMという診断基準の改訂をうけて(ミネルヴァ書房)
- ・参考資料 1：DSM(Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders) アメリカ精神医学会(American Psychiatric Association) 心の病気に関する診断基準。日本では「精神障害の診断と統計マニュアル」「精神疾患診断統計マニュアル」などと呼ばれる。
- ・参考文献 14：平成 27 年度 C S P トレーナー養成講座 資料
講師：特定非営利活動法人子ども家庭サポートセンターちば 本多 泉氏
- ・参考資料 2：神戸少年の町版 コモンセンスペアレンティング トレーニングビデオ
- ・研修：「行動上に問題を抱えた子どもの理解と対応」～愛着障害の観点から～
講師 岩手大学教職大学院設置準備室准教授 佐々木全 氏